

大学生の「書く力」の実態調査

山本裕子

中部大学人文学部日本語日本文化学科

hiroko-y@isc.chubu.ac.jp

1. はじめに

ゆとり教育や少子化の影響から、大学生の学力低下が指摘されている。学力の根幹を支える母語の運用能力が低下していると言われ¹⁾、基礎的な日本語運用能力をつけることは大学においても重要な教育課題となっている。「書けない」「読めない」学生の存在は直感的には合意があるが、具体的にどのように日本語運用能力が欠けているのか、詳しい分析はされていない。しかし問題点が明確でなければ、手当てもできない。そこで本稿では特に「書く力」に注目し、「書けない」内容を明らかにするために行った予備的な調査の報告を行い、今後の手立てを考える。

2. 実態調査

2.1 調査の方法

- ・被験者 「日本語力テスト²⁾」で高1レベル以下と判定された20名(Aグループとする。平均スコア538.6点)と高3レベルの10名(Bグループとする。平均スコア724.3点)
- ・方法 「携帯電話の長所と短所について」という題で800字の小論文を書かせ、以下の項目について分析

2.2 分析項目

第2言語習得の分野で「書く力」の測定基準を定めたものに生田(2006)、田中・長阪(2006)がある。本稿では数量的分析も含めて行われた生田(2006)を参考に以下の項目を設定した。

1. 産出量 文字数 漢字使用率 語彙量(延べ・異なり)³⁾
2. 構成 段落数 一文当たりの字数
3. 正確さ 漢字誤用 a.誤漢字 b.漢字未使用 c.その他(過剰使用・送り仮名ミス)
文法的誤用 活用のミス 例:「見れることができます。」
語彙的誤用 例:「この問題は将来、日本に響くと思うのである。」
その他 表記ミス(カタカナ語・ひらがなの脱落)
例:「モータ」「いい思う。」

4. 適切さ(文体)話しことばの使用

3. 結果と考察

3.1 全体的傾向

・得点との相関が見られるもの

高得点の方が量が多い：漢字使用率、語彙数、異なり語数

低得点の方が量が多い：話し言葉使用数

表1 得点との相関（全体）

項目	文字数	漢字率	語彙数	異なり語	段落数	一文文字	漢字誤用
	0.329	0.507**	0.378*	0.681**	0.166	-0.202	-0.213
項目	未使用	その他	文法誤用	語彙誤用	その他	話ことば	
	-0.355	-0.347	-0.012	0.246	0.106	-0.492**	

**1%水準で有意 *5%水準で有意

・グループ間で有意な差が見られるもの

漢字使用率、語彙数、異なり語数、話し言葉使用数

有意差はないが産出量はBが大きく、正確さ、適切さはAが大きい(=誤用が多い)傾向はある。つまり、Bグループは全体的に「語彙量があり、間違いが少ない」ものを産出している。

表2 グループ間の差（*は有意差が見られたグループ）

項目		平均値	SD	t 値	項目		平均値	SD	t 値
1 文字数	A	653.53	111.03	t(27)=-1.84	b 未使用	A	3.00	3.14	t(27)=1.92
	B	724.30	67.32	n.s.		B	1.00	1.25	n.s.
1 漢字率*	A	27.45	4.12	t(27)=-2.59	c その他	A	0.89	1.05	t(27)=1.99
	B	31.27	2.98	p<0.05		B	0.20	0.42	n.s.
1 語彙数	A	192.00	37.28	t(27)=-1.97	3 文 法誤用	A	0.26	0.45	t(27)=-0.20
	B	216.90	18.63	n.s.		B	0.30	0.48	n.s.
1 異なり*	A	97.68	21.43	t(27)=-4.26	3 語 彙誤用	A	0.16	0.37	t(27)=-1.43
	B	128.50	10.40	p<0.01		B	0.60	1.26	n.s.
2 段落数	A	4.84	2.03	t(27)=-0.57	3 その他	A	0.47	0.84	t(27)=-0.41
	B	5.30	2.06	n.s.		B	0.60	0.70	n.s.
2 一文文字	A	45.24	15.12	t(27)=-0.53	4 話こ とば*	A	3.63	3.83	t(27)=3.14
	B	43.25	4.62	n.s.		B	0.60	1.26	p<0.01
3 a 漢字誤用	A	2.52	4.20	t(27)=1.27					
	B	0.80	1.03	n.s.					

・グループ内部の特徴

Bグループは全体に問題が少ない＝一定水準を超えると安定する、と見えそう。

Aグループは個人差が大きい、得点が低い人に問題が多いとは言えない。

3.2 項目別に見た傾向

3.2.1 産出量

少なくとも80%（640字以上）書くようにという指示をした。Bはほぼ量的水準はクリア。

Aは36%がクリアしていない。また極端に短い被験者が2名。ただし得点が特に低いとはいえない。

漢字使用率 Bは安定。Aは個人差大きい。

参考：『知へのステップ』では40.6% 『論文ワークブック』では34.6%

語彙量 Bの方が多。多だけでなく、質的にも違いそう。

3.2.2 構成

A、Bどちらも個人差が大きい。(1～10)どちらも適切な段落構成ができていない可能性大。

一文当たりの字数はBグループは分散が低く(19.25)安定していると言える。

Aグループは個人差が大きい(23.1～77.9)Aは適正な文字数を習得していないと言える。

参考：適切な文字数：40字程度（学習技術研究会（2002:132）

3.2.3 正確さ

文字誤用 揺れ：形式名詞の表記「～事/こと」「物/もの」

語彙的誤用 両グループに見られる。個人差が大きい。特に得点とは関係なし。

A：「携帯電話とは、全くもって優れた機械であるといえる。」

B：「頭に据置く必要がある」「重大な社会問題を引き起こす根底になっている」

3.2.4 適切さ（文体）話しことばの使用

・語彙レベル Aに多い。個人差があり、多い人は非常に多い。

品詞も多岐にわたる。動詞（ら抜きことば「見れる」）、名詞（親 おじさん）、形容詞（す

ごい、めんどくさい、しょうがない）、副詞（ある意味～、）、接続詞（なので、あと）等。

・文体レベル Aに2名。（常体 敬体、すべて敬体）Bも一名（すべて敬体）。ただし、いずれも1年生なので、適切な文体についての理解がなかった可能性も高い。

3.2.5 その他

Aグループに多く見られたものとして以下のものがある。

・文末表現「～のだ」「～である」の不自然な使用。

・体言止めの多用

・接続詞の未使用

- ・ 極端に長い文（ねじれ文）

4. まとめと今後の課題

- ・ 日本語力テストとの関係：ある水準に達すると「問題」は減る。
- ・ 質的な分析の必要性。漢字使用レベルや内容的な評価との関係。学年による差の有無。
- ・ 低得点者の課題：語彙量を増やす<間違いを減らす。「使える表現」を「正しく使う」ことを目指す。
- ・ 高得点者の課題：適切な構成。表現をより豊かに。

注

- 1) 小野他(2005)によると、中学生レベルの国語力の学生は国立大で6%、四年制私立大で20%、短大では35%にのぼるといふ。
- 2) 「日本語力テスト」はメディア教育開発センターが開発したもので、昭和61~63年度に全国の約20万人の中・高生を対象に、日本語力を構成する語彙、助詞、漢字、文型、指示語、前提、含意の7項目についてその習得状況を調査し、標準化された発達基準に従って作成されている。また小野他(1989)で指摘されているように語彙力が全般的な言語能力を反映するということから、語彙力を測定することで日本語力を測定しようというものである。レベル判定は800点満点で以下の通り。高3レベル(595点以上)高2レベル(569~594点)高1レベル(532~568点)中3レベル(489~531点)中2レベル(454点以下)
- 3) 語彙量是小論文をテキストファイルにして茶笥にかけ、自立形態素数をカウントしたものである。

引用文献

- 生田裕子(2006)。「ブラジル人中学生の『書く力』の発達 - 第1言語と第2言語による作文の観察から - 」『日本語教育』128号, 70 - 79. 日本語教育学会 .
- 小野博他(1989)。「日本語力検査の開発」『文部省科学研究費報告書』, 1-116. 東京学芸大学 .
- 小野博他(2005)。「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育 - IT活用学力支援研究 - 」NIME 研究報告, 第6号. メディア教育開発センター .
- 田中真理・長阪朱美(2006)。「第2言語としての日本語ライティング評価基準とその作成過程」『世界の言語テスト』253 - 276. 国立国語研究所 .

参考資料

- 学習技術研究会編(2002)『知へのステップ』くろしお出版 .
- 浜田麻里他(1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版 .
- 日本語力テストについて http://www.obunsha.co.jp/category/for_school/placement_test/index.html